

小学校の教科に関する科目「家庭科内容論」の授業内容の検討

A Study of the Lecture Contents about "Contents of Home Economics"

志 村 結 美

Yumi SHIMURA

時 友 裕 紀 子

Yukiko TOKITOMO

田 中 勝

Masaru TANAKA

神 山 久 美

Kumi KAMIYAMA

岡 松 恵

Megumi OKAMATSU

川 島 亜 紀 子

Akiko KAWASHIMA

小学校の教科に関する科目「家庭科内容論」の授業内容の検討

A Study of the Lecture Contents about "Contents of Home Economics"

志村 結美*

時 友 裕紀子*

田 中 勝*

Yumi SHIMURA Yukiko TOKITOMO Masaru TANAKA

神 山 久美*

岡 松 恵*

川 島 亜紀子*

Kumi KAMIYAMA Megumi OKAMATSU Akiko KAWASHIMA

I 緒言

これからの教員に求められる資質能力として、文部科学省中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」（中央教育審議会答申2012年8月）において、①教職に対する責任感、探求力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感、責任感、教育的愛情など）、②新たな課題に対応できる知識や技能を含む教科や教職に関する高度な専門的知識、③総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、連携・協働できる力など）を挙げ、教員の資質能力を高めるために、「主体的に努力するとともに、それが陳腐化しないよう絶えざる刷新を続ける」という「学び続ける教員像」の重要性で述べている。また、同答申では、教職課程を有する大学の役割についても記載されており、教職課程のカリキュラムについて、教科や教職に関する専門的知識の修得を中心に展開し、教科に関する専門的理解を十分身に付ける際には、教科の実際に即した内容とするため、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」を架橋する内容を展開することが必要であると述べている。

本学では、小学校教諭免許状取得のために必要な家庭科に関する科目として、教職に関する科目である「初等家庭科教育法」と教科に関する科目である「家庭科内容論」を設置している。「初等家庭科教育法」は、家政教育系教員のうち教科教育法担当の教員1名が担当し、「家庭科内容論」は2014年度までは教科専門担当の教員1名が全時間を担当していた。しかし、両者を架橋する内容を展開することが求められていること、児童の生活体験の低下が憂慮されること、受講学生からの実践的な実習を含んだ授業の要望が高いこと、「初等家庭科教育法」の受講学生の技能等に課題が認められること等から、2015年度より、家政教育系教員全員がオムニバス形式で担当し、専門的知識の理解をより深めることにした。その際に、家政教育系教員全員で授業内容について検討を行い、受講生の教員としての資質能力の向上のために、調理・被服実習、ワークショップやグループワーク等の活動を多く取り入れることにした。受講生の評価も全員で行い、学生の情報等も密に連絡がとれるような配慮を行っている。また、「初等家庭科教育法」では、小学校家庭科に関する指導方法を中心に行い、「家庭科内容論」では、小学校家庭科の具体的な指導内容の理解を深めることを中心に行う等の連携も強く取ることとした。

以上、本研究では、小学校の教科に関する科目「家庭科内容論」を家政教育系教員全員がオムニバス形式で担当することになり2年半が経過したことを踏まえ、授業を受講した学生の実態等を調査することにより、「家庭科内容論」の成果と課題を明らかにし、今後の授業内容への示唆を得ることを目的とする。

II 方法

2017年度前期受講生40名のうち、2017年7月の前期最終回の授業に出席した38名を対象に、授業に

* 社会文化教育講座

関する記名自記式アンケート調査（有効回収率100%）を実施した。回答者は、2年生1名、1年生37名であり、男性25名、女性13名であった。調査内容は、「家庭科内容論」受講後の認識や家庭科に関する認識等についてである。

Ⅲ 結果及び考察

1. 「家庭科内容論」の授業の概要

(1) 授業の目標

「家庭科内容論」の授業目標は、「小学校家庭科の内容について理解し、それぞれの領域・内容について理解を深める。また、児童をめぐる家庭、学校、地域の実態を踏まえた上での家庭科のあり方について考える。」であり、到達目標は、「家庭科教育の目的や意義を理解し、小学校家庭科の教育目標、教育内容、指導方法について理解する。また、衣食住、家族、消費生活の専門内容について理解を深めるとともに、実習を通して自分自身もこれらの内容について体験的に習得する。」と設定している。

(2) 授業の概要

2017年度前期実施した「家庭科内容論」の授業の流れは、以下の通りである。

表1 家庭科内容論の授業の流れ

回	内容	
1	オリエンテーション	
2	小学校における食生活に関する学習	
	Aグループ	Bグループ
3	調理の基礎	快適な衣服
4	調理実習	被服実習
5	快適な衣服	調理の基礎
6	被服実習	調理実習
7	家庭生活と家族	
8	家族・ライフスタイルと住まい	
9	快適な住まい	
10	住まい方の工夫と実践	
11	現代の家族をめぐる課題	
12	身近な消費生活と環境1	
13	身近な消費生活と環境2	
14	身近な消費生活と環境3	
15	総括	評価・まとめ

全体のオリエンテーション後、食生活内容と衣生活内容に関しては実習室の収容人数の制約から、2つのグループに分け、講義と実習を行った。その後、家族・家庭生活内容、住生活内容、消費生活・環境内容と、学習内容によって担当者を変更しながら授業を進め、最後に総括として、これまでの授業のまとめ及び試験を行った。

2. 各学習内容の講義概要

各学習内容の講義の概要は以下の通りであった。

(1) オリエンテーション

全体的な授業の流れと、受講上の注意事項を説明し、2017年3月告示の次期学習指導要領全体の改訂のポイント、小学校家庭科の改訂のポイントについて、概説した。

(2) 家族・家庭生活内容

家族・家庭生活については、初めに現行及び、次期学習指導要領について講義を行った。現行学

習指導要領で新設されたガイダンスの内容や次期学習指導要領でさらに重視されている地域の人々とのかわりについて、また「見方・考え方」の「協力・協働」との関係について説明を行った。具体的には、現行小学校家庭科教科書（東京書籍出版）、デジタル教科書を用いて、学習内容の確認を行った。その後、「家族・家庭生活」の授業の学習指導案の書き方について取り上げ、家庭の仕事について、児童自らが自分の仕事として取り組むことが出来るように、意思決定プロセスを取り入れて、児童自らが主体となって考え、気づき、探究し、判断するプロセスを組み込むことによって実践的な態度を培う必要があること等、考えを深めていった。その後、DVD「つみきのいえ」（監督加藤久仁生、東宝2008 第81回アカデミー賞短編アニメ賞受賞）を視聴し、家族や家庭の意味について学生自らが考え

ていくことができるように、指導の工夫を行った。

また、家庭生活と仕事に関するDVD視聴や教材例などを見ながら、家族の一員としての家庭の仕事、生活時間の工夫、家族への協力などに関する指導内容について、考えを深めた。

最後に、家族・家庭生活の内容で小学生に考えさせたい内容、家庭との連携を図り、家庭科の学習内容を実生活に活かし続ける指導の工夫等について、意見をまとめ提出することを課題とした。

(3) 食生活内容

食生活については「食事の役割」と「栄養を考えた食事」、および「調理の基礎」の講義を各1時間(90分)行ったのち、次の時間に調理実習を行った。

「調理の基礎」の時間には、現行学習指導要領解説と小学校家庭科教科書を用い、次回に行う炊飯、みそ汁、茶の淹れ方の調理実習の説明を行った。

実習の説明で留意したことは、持ち物と身支度、計量スプーンやカップの容量、包丁とまな板など調理器具の扱いと安全・衛生、米の計量・洗い方、煮干しの下準備、青菜の洗い方、野菜の切り方である。教員があらかじめ撮影した調理過程の写真(プロジェクタによる映写)により各操作の方法を確認させた。強調したことは、大学で調理実習をする意味であり、各自が小学校で調理実習を指導する立場になった時のことを考えて実習をすることである。

調理実習は、調理台1台に学生5名(調理台4、1クラス20名)の編成である。90分授業のため、みそ汁の材料はあらかじめ教員が各班に配布しておいたが、米、みそ、煮干し、茶葉は学生が計量するようにした。

ガス火をコントロールしての炊飯では、炊飯中の米の様子を観察するように指示した。みそ汁の具には、じゃがいも、青菜(こまつな)、油あげを用いた。全員が一人1/2個のじゃがいもの皮を包丁で剥き、班の中で同じ大きさに切るように指示した。青菜の洗い方、ゆで方も同時に実習させる目的で、こまつなをみそ汁の具に用いた。煮干しの頭とはらわたを取る作業も全員がするように指導した。緑茶は、家族のために茶を淹れる学習のために取り入れたものであるが、同時にガス火の扱い方と緑茶の淹れかた(急須の扱い方)を会得させる目的もあった。

盛り付け、配膳と食事のマナー、後片付け、ゴミの処理、掃除までの一連の作業についても確認した。実習記録のプリント提出を課題とした。

(4) 衣生活内容

衣生活では1時間目を講義とし、2時間目と3時間目は被服実習を行った。講義では、小学校家庭科の現行及び次期学習指導要領の衣生活に関する内容を説明するとともに、小学校の家庭科の教科書を用いて、衣生活領域の特徴や、各内容の関連を説明した。また学習指導要領の内容及び教科書への反映については、理解しておくことを課題とした。被服実習については、製作するブックカバーの概要を説明すると共に、被服実習の意義や、指導上の要点について理解させた。2時間目の被服実習では、実習における安全性とミシンの基本的な操作法について説明し、ブックカバーの表布にスラッシュキルトという装飾を施すことを行った。3時間目の被服実習では、裏布と合わせてミシン縫いし、手縫いによる仕上げをし、ブックカバーを完成させた(写真1)。製作にあたっては予め準備したプリントや動画を用いて説明した。時間内に出来ない者は補習をした。

スラッシュキルトは近年流行したもので手芸書も何冊か出版されてい



写真1 スラッシュキルトのブックカバー

る。おおよその作り方は、数枚重ねた布地に正バイアス方向にミシン縫いをし、一番下の布地を残して切り込みを入れ、洗濯することによってうねりを出すというものである。布地を重ねることによって重厚感が出、切り込みの間隔や布地の配色によって個性的な表現が出来る。授業では「小学校の技法で大学生の作品を」ということを念頭に置かせ、小学校家庭科で習得するミシンの直線縫いや手縫い技法だけで、自分の好みに合ったブックカバーを製作させた。

(5) 住生活内容

住生活についてはまず、小学校家庭科の新旧学習指導要領の内容を確認したあと、教科書の内容に対応させて「気持ちのよい住まい方を工夫する」ことを考え実践する構成とした。授業を進めるうえで留意したことは次の2点である。第1に、学習指導要領や教科書の内容に準拠した授業内容としながらも、本授業が小学校から高等学校までの家庭科住生活学習の導入部にあたることから、「住まいとは何か」、すなわち住まいの役割・機能について考え、また自分や家族の住まい方について見つめ直す機会を提供することである。具体的には、「サザエさんの家」を例に平面図の読み方に触れ、次に「私の家」（清家清）や「住吉の長屋」（安藤忠雄）等の住宅設計例を取り上げ、住まいが家族のあり方やライフスタイルと密接に関わっていることに気づかせようとした。課題レポートとしては自室（マイルーム）の間取り図作成と住まい方の採取を課した。

留意点の第2は学生参加型の授業スタイルを組み込むことであり、第2回の授業で試みた。2回目の授業は「気持ちのよい住まい方を工夫する」をテーマとし、①夏に涼しく暮らす工夫、②冬に暖かく暮らす工夫、③汚れ探しと掃除の計画、④身のまわりの整理・整頓、⑤その他（光環境、音環境）の5項目を取り扱った。①と②ではまず、「夏涼しい家や冬暖かい家はどんな家か」をグループワーク形式で考え、A3用紙にまとめたものを使ってプレゼンテーションを求めた。次に、住宅月間発行の小学校家庭科副読本『考えよう！住まい方のくふう』を活用した。集合住宅に暮らす家族の夏と冬との住まい方の変化を描いたイラストを見比べ、季節の変化に合わせて住まい方を工夫し実践することの大切さにつなげた。住まいの気密性、断熱性、通風、換気、日射遮蔽、排熱等の関連する基礎的事項についても概説した。

③「汚れ探しと掃除の計画」では、自分の部屋のどこがどのように汚れているか、汚れの場所・種類・内容・原因と掃除方法・道具をワークシートに記入させ、掃除の実践につなげるために学生による汚れ落としと掃除の実践例を紹介した。④「身のまわりの整理・整頓」では生活財・モノの分類、整理と整頓の違いについて説明した。⑤その他では採光と照明の定義、照度、色温度、照明器具、照度基準等を解説するだけでなく、照度計を使って実際に教室の照度測定を行い、光環境を適切に整えることの必要性を肌で感じてもらった。音環境については、好きな音、嫌いな音、ちゃんと聞こえてほしい音、よく聞こえるようにしたい音、聞こえないようにしたい音は何かをグループで話し合い、その結果を発表して全体で共有するスタイルとした。また、スマートフォンを使って再現した様々な生活音に耳を傾けながら、防音・遮音対策や生活上のマナーなどについて考える展開とした。

(6) 消費生活・環境内容

消費生活・環境については、小学校家庭科の現行及び次期学習指導要領、その背景にある社会の変化や消費者教育推進法などに関して講義を行った。その後、学習指導要領解説を読み、大切だと思うポイントを箇条書きで記述し、それらが小学校家庭科教科書にどのような内容でどのような扱いとなっているか確認をしながら、消費生活・環境の指導の基本の理解を深めた。山梨県県民生活センターwebサイト「やまなしの消費者教育」に掲載されている小学校向け消費者教育教材の紹介、消費者庁「消費者教育ポータルサイト」、金融広報中央委員会「知るぽると」のwebサイトなどを紹介し、「消

費者教育の体系イメージマップ」などで児童の発達段階や体系的な指導内容について確認しながら、どのように授業展開をしていけばよいかを考えていった。次時には、山梨県県民生活センターに出向中の現職小学校教員を招聘し、「実践につなげる消費者教育」というテーマで連携授業を行った。現職教員の授業実践例を見ながら、授業案の一部をグループで考え発表させた。最終回の授業では、持続可能な社会の構築や次期学習指導要領で新設となる消費者の役割について深く考えさせるために、エシカル消費（倫理的消費）に関するワークショップを行った。グループメンバーと意見交換をしながら、自立した消費者としてこれからどのように消費生活をしていけばよいか考えていった。レポート課題として、消費生活・環境に関する授業提案をまとめ提出させた。

3. 受講学生の認識とその考察

(1) 受講後の各学習内容の認識

各学習内容について、学習した内容のまとめと感想を自由記述で回答を求めた。分析は、記述文を内容ごとに分割し、カテゴリーに分けて、その傾向を明らかにすることにした。

① 家族・家庭生活内容（参照 表2）

表2 家族・家庭生活内容のまとめと感想

A 家族・家庭生活の気づき、実践など	回答数
1 家族・家庭生活の大切さと家族への感謝	10
2 家庭生活の見直し	8
3 家庭の仕事の分担や協力の意欲	5
4 家族の一員、家族の中での役割の自覚	3
5 家庭の仕事の実践	2
6 隣人・地域の人々との関係	1
小計	29
B 教育内容とその工夫	回答数
1 家族の一員であることの自覚の大切さ	7
2 「自分の成長」について	3
3 指導上の注意点について	3
4 「家庭の仕事」について	1
5 「家族・近隣の人等のかかわり」について	1
6 学習指導要領の内容について	1
7 家庭での実践と学校での学習との関連	1
小計	17
C 教育方法	回答数
1 ビデオ視聴が心に残った	5
2 ビデオ活用がわかりやすい	2
小計	7
その他	
	3
合計	56

家庭科内容論は小学校の家庭科を教授するため、学習内容を理解し、その指導方法について考えを深めることを目標としているが、家族・家庭生活の学習内容において、全体の半数以上（51.7%）が、自分自身の家族・家庭生活への気づき、そして自らの実践に関する感想を回答した。中でも、家族・家庭生活の大切さと家族への感謝、自分自身の家庭生活を見直すこと、家庭の仕事を分担し、協力をするなどへの意欲等々が多く、家庭科の学習内容は小学生のみならず、大学生にとっても必要な内容であることも再確認された。

比較して、教育内容やその指導方法の工夫等に関する内容は30.4%と低く、高校を卒業したばかりの1年生が中心の受講生にとって、教師としての意識の育成を促す講義の必要性が認められた。

② 食生活内容（参照 表3）

栄養に関する学習、米飯とみそ汁の実習とも小・中学校で既習である。しかし、学生自身の日常生活に活かしていないことから両題材とも学生にと

って新鮮であることがうかがえた。そのため、自分自身の食生活に対する気づきに関する感想が大半を占めた。教育内容とその工夫や教育方法についての感想は少なく、自らが教員となって授業をする立場を考えて受講する姿勢はやや乏しいと考えられた。

③ 衣生活内容（参照 表4）

衣生活に関する内容としては、「季節や環境に合わせた快適な着方」や、「衣服の適切な取り扱い」などについて、学んだことを日常生活で実践している様子が伺えた。回答数が多かったのは「被服実習に必要な技能の習得および確認」であった。学生にとっては、裁縫は日常的なものではなく、今回の被服実習がこれまで学んだことを再確認する機会となったようである。また「被服実習の楽しさや達

成感」に加え、「製作品の積極的な使用」など、製作品の実用性も重要であるという気づきもみられた。一方、教員の視点に立った回答は少なかった。

表3 食生活内容のまとめと感想

A 食生活の気づき、実践など	回答数
1 調理の基礎の実践	9
2 栄養バランスを考えて献立を考え食事をする	8
3 栄養素とその働き	6
4 調理をする大変さ	2
5 食事の楽しさ	2
6 食事の大切さ、日常の食事への理解	2
7 正しい調理方法の知識	2
8 調理をする大切さ	1
小計	32
B 教育内容とその工夫	回答数
1 調理をする上での注意点など	4
2 調理の基礎	2
3 1食分の献立作成	2
4 調理実習の楽しさ	2
小計	10
C 教育方法	回答数
1 調理実習を児童に教える上でのポイント、留意点	2
2 体験的な活動の大切さ	1
3 実習前の班活動の導入	1
小計	4
合計	46

表5 住生活内容のまとめと感想

A 住生活の気づき、実践など	回答数
1 季節や環境に合わせた快適な住まい方	10
2 快適な住生活を送るにはどうすればよいか	9
3 住まいや住まい方の大切さ、工夫	6
4 自分の住まい方を見つめ直せた	6
5 音環境	4
6 光環境(照度、色温度など)	2
7 住まいの役割	2
8 整理整頓を実践	1
9 温熱環境	1
10 住まいの変化(昔と今)	1
11 地域(気候)と住まいとの関係	1
12 掃除(頻度など)	1
13 先人の知恵や工夫	1
14 風の取り入れ方	1
15 将来の自分の家を自分で設計してみたい	1
16 生活の質を見直すきっかけ	1
小計	48
B 教育内容とその工夫	回答数
1 熱環境は小学生には難しい	1
2 簡単な言葉で説明する必要	1
小計	2
C 教育方法	回答数
1 グループワーク形式	4
2 自分の家(部屋)の間取り図と住み方調査	4
3 実践的授業内容(住まい方比較、照度測定など)	2
4 住居の模型	1
5 Q&A形式	1
小計	12
合計	62

表4 衣生活内容のまとめと感想

A 衣生活の気づき、実践など	回答数
1 被服実習に必要な技能の習得および確認	23
2 季節や環境に合わせた快適な着方	9
3 衣服の役割	7
4 被服実習の楽しさや達成感	5
5 日常の衣生活への応用	5
6 製作品の積極的な使用	5
7 衣服の適切な取り扱い	4
8 被服材料への理解	3
9 衣服の大切さの実感	2
10 衣文化への興味	1
11 被服材料の特性を利用した被服製作	1
小計	65
B 教育内容とその工夫	回答数
1 被服実習における生徒の個人差への対応	1
2 教員としての技能向上の必要性	1
3 被服実習の製作品における個性の発揮	1
4 被服実習における技法理解に基づいた作品製作への応用	1
5 被服実習におけるジェンダーレス	1
小計	5
C 教育方法	回答数
1 実習	24
2 仲間からのサポート	1
小計	25
合計	95

④住生活内容(参照 表5)

「季節や環境に合わせた快適な住まい方」や「快適な住生活を送るにはどうすればよいか」といった点で学生の理解が深まったことがわかる。「住まいや住まい方の大切さ」を感じとり、「自分の住まい方を見つめ直せた」という学生も現れた。また、教育方法としては、今年度前期に初めて試みたグループワーク形式による参加型授業に加えて、照度測定等の活動、自室(マイルーム)の調査等、いずれも一定の評価を得ているようにみえる。

⑤消費生活・環境内容（参照 表6）

表6 消費生活・環境内容のまとめと感想

A 消費生活・環境の気づき、実践など		回答数
1 お金の使い方の見直し		5
2 環境への配慮		5
3 物の選択・意思決定の検討		3
4 消費者の役割や社会への影響の自覚		3
小計		16
B 教育内容とその工夫		回答数
1 授業づくり・指導の工夫について		10
2 消費者の役割について		4
3 フェアトレードについて		3
4 「物や金銭の使い方」について		2
5 「環境に配慮した生活」について		2
6 「物の選び方・買い方」について		1
小計		22
C 教育方法		回答数
1 外部講師（現場教師）の話がよかった		6
2 グループワーク（ワークショップ）がよかった		5
小計		11
合計		49

消費生活・環境に関する今回の授業では、現職教員の招聘、発展的教材の紹介、ワークショップなどを導入したため、特に、表6で「B教育内容とその工夫」（小計22名：44.9％）の回答数が多く、また「C指導内容の工夫」において、外部講師（現場教師）の話やワークショップに関して書かれた感想や考えから、学生にとって印象深い内容であったと確認できた。

また自分自身の消費生活・環境に配慮した生活への気づきや、物の選択、お金の使い方の見直しなど、自らの実践につなげた回答も見られた。

以上、全ての内容において全員の記述が認められ、特に自分自身の生活への気づきや実践が多く認められたことにより、授業が有効であったと考えられる。しかし、教育方法に関する記述や教員の視点にたった記述が少ない等が、1年生を中心にした受講生が中心であることを鑑みても課題として考えられる。

(2)「家庭科内容論」における実習に関する認識（参照 図1）

実習を行っている食生活内容と衣生活内容について、回答を求めた。

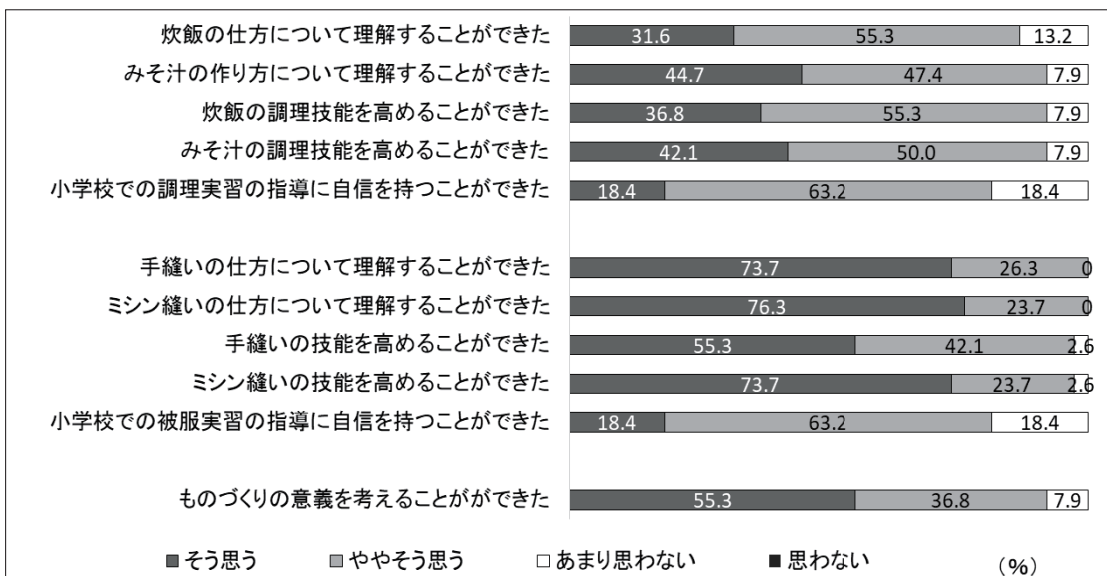


図1 実習に関する認識

調理実習では日常的に調理を行っていない学生に対し、短い実習時間であるが、多くの調理方法や調理理論を確認させることを目的とした。この意図を学生が理解したかどうかは本調査においては明

らかではないが、米飯、みそ汁の調理方法の理解や技能の獲得については90%の者が、また、小学校における実習の指導に対する自信についても80%の者が肯定的な回答をしていたことから、調理実習を「家庭科内容論」で実施する目的が達成されたと考えられる。

被服実習では、2時間以上を費やしたためか、手縫い・ミシン縫い共、全ての者が理解し、技能の向上についてもほぼ全ての者が実感できたと回答した。手縫いに比べてミシン縫いの理解度・習熟度が高かった理由としては、製作品であるスラッシュキルトがミシン縫いを多用するためであったと推測される。また、80%以上の者が小学校における被服実習の指導に自信を持つことができたと感じていた。

また、ものづくりについて、90%の者がその意義を考える事ができたと回答した。

以上、炊飯・みそ汁、手縫い・ミシン縫い等の調理・被服実習は、受講生の知識・理解と技能を高め、ものづくりの意義に対する考えを深めることに有効であり、その効果が確認されたとと言える。また、このことは、小学校教師として家庭科の実習を指導する際に必要な、知識や技能に裏付けされた確かな自信を得ることにつながったと考えられる。

(3) 受講後の自分自身の変容（参照 表7）

「家庭科内容論」を受講して、自分自身の生活や考え方に影響や変化があった学生は、34名（89.5%）であり、ほとんどの学生が自分自身の生活や考え方に変容があったと回答した。変容のあった学生の具体的な変容に関する自由記述の概要は、表7のとおりである。

表7 受講後の自分自身の変容

家族・家庭生活
・家族との協力や自分の家庭での役割や仕事を考えるようになった(7人)
・生活時間の使い方を無駄のないように工夫した。
食生活
・以前より料理をすることが増えた(8人)
・バランスよく食事をするようになった(2人)
・食品の原産地表示や消費期限等をみるようになった。
衣生活
・季節にあった服装に気を付けるようになった。
・洗濯の取り扱い絵表示を見るようになった。
住生活
・季節にあった快適な住まい方を工夫するようになった(10人)
・部屋の掃除や整理整頓を心がけるようになった(5人)
消費生活・環境
・お金の使い方に気を付け買い物の計画や家計簿をつけるようになった(12人)
・環境に配慮した生活をするようになった(3人)
・消費者教育について理解した。
・フェアトレードについて調べてみた。

学習内容を網羅して記述が見られ、授業全体が学生自身の変容に影響を与えていることが推察できる。家庭科教育の特筆すべき点は、大学生が小学生の学習指導に関する授業を受講することにより、指導内容・方法を学ぶだけでなく、現在の生活に関する学びができ、自らの生活を振り返ることができることである。大学生にとって、小学校で学習する内容は、ただ指導するだけの内容ではなく、現実の自らの生活をよりよく工夫することができる実践的な学習となり得るのである。むしろ、大学生になり、生活を自らの手で行うようになった時期だからこそ、重要性に気がつくのかもしれないが、その気づきが、小学校の家庭科の指導や「家庭科内容論」の授業への意欲向上に役立つことを期待したいところである。しかし、この点は、小・中・高等学校の家庭科教育の限界や課題でもあり、自らの手で生活を行わず、生活実感の乏しい小・中・高校生がいかに具体的、主体的に学びを捉えることができるか、今後さらなる指導の充実が必要とされていると言えよう。

(4) 児童に育成したい力・指導の工夫（参照 表 8・9）

「家庭科内容論」の受講後、小学校家庭科において児童に育成したい力は何か、また、そのために指導の工夫をどのようにしたらよいか、自由記述にて回答を求めた。分析は、記述文を内容ごとに分割し、カテゴリーに分けて、その傾向を明らかにすることにした。

①児童に育成したい力

表 8 児童に育成したい力

項目		回答数
実践力		10
生活力		9
生きる力・自立		8
主体性		4
社会性・共生		4
学習 内容	家族・家庭生活	6
	消費生活・環境	4
	調理	1
合計		46

児童に育成したい力に関する記述は、表 8 のようにまとめることができた。具体的な記述例は以下のとおりである。

- ・実践力：自ら考え工夫し実践する力・現在や将来の生活において家庭科で学んだことを実践していく力他
- ・生活力：生活を工夫する力・基本的な日常生活を理解し、人や物の関わりを理解する力他
- ・生きる力・自立：生きる力・豊かに生きていく力・一人で生き抜く力・自立他
- ・主体性：自ら主体的に取り組み、また課題や工夫する考えを持つ態度・自らやるという意識他

- ・社会性・共生：社会の一員として自覚を持ち生きる力・周囲の人と協力できる力他
- ・学習内容 家族・家庭生活：家族の一員として生きる力・家族を大切にできる心情他
- ・ " 消費生活・環境：環境を考えた消費生活を行う力他
- ・ " 調理：調理できる力

以上は、小学校を含めた家庭科の現行及び次期学習指導要領において、児童・生徒に育成したい力として掲げられている能力であり、概ね、受講生は小学校の家庭科の目標等を理解することができたと推察された。

②指導の工夫

表 9 指導の工夫

項目		回答数	
学習活動	主体的な活動	6	
	体験的な活動	6	
	実践的な活動	5	
	具体的な学習活動	実習	8
		対話的な活動・意見交流	6
		グループ活動	5
		調べ学習	1
シミュレーション	1		
小計		38	
学習内容	生活に関する内容	9	
	身近な内容	6	
	具体的な内容	4	
	具体的な学習内容	衣食住の分野との関連	2
		環境に関する内容	2
		自立に関する内容	1
		共生に関する内容	1
小計		25	
学習指導	丁寧・熱心な指導	2	
	関心意欲を喚起する指導	1	
小計		3	
家庭や地域との連携	家庭や近隣との連携	7	
	家庭での手伝い等の実践	2	
小計		9	
合計		75	

小学校家庭科の指導の工夫は、学習活動、学習内容、学習指導、家庭や地域との連携といった大項目に分類することができた。回答数は、多いものから順に、学習活動に関する記述が全体の約半数、次いで、学習内容が約4分の1、家庭や地域との連携が1割強であった。

また、学習活動の下位項目として、上記の育成したい力に関連し、家庭科の教科の独自性である実践的、体験的な活動、主体的な活動があげられた。具体的な学習活動としては、実習や次期学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」に関連した対話的な活動、グループ活動に関する記述が多く認められた。

学習内容の下位項目としては、生活や身近で具体的な内容があげられ、具体的な学習内容としては、現代の家庭生活で求められている課題の解決に関する記述が見られた。

家庭や地域との連携においては、家庭での実践、家庭や近隣との連携に関する記述が見られた。

(5) 小・中・高等学校家庭科に関する認識（参照 図2）

受講者が小・中・高等学校で学習した家庭科に関して、どのような認識を持っているのか、回答を求めた結果、家庭科に関する有用感、役立ち感に関する「③家庭科の学習は生きていくために必要である」、「②今後、家庭科で学んだことは生活に役立っていくと思う」、「①現在、家庭科で学んだことが生活に役立っている」の項目において、肯定的な回答が多く見られ、家庭科の必要性や重要性を認識していることが推察された。その他の項目においても、概ね肯定的な回答が多く見られ、家庭生活における課題解決や男女の協力について、家庭科の学習が有効であるとともに、グループ活動や家庭での実践についても肯定的に捉えられていることが明らかとなった。現行及び次期学習指導要領でより一層重視されている異世代理解や地域・社会の一員としての認識についても概ね肯定的であり、家庭科での取り組みの成果と考えられる。一方で、将来的展望に関する「④将来の夢や希望を具体的に思い描く授業を家庭科で受けた」、「⑤家庭科を学んだことで将来の生き方や進路を積極的に考えるようになった」については、両者とも「そう思う」との回答が15%程度であり、これらの内容については今後の指導の充実が求められていることが明らかとなった。

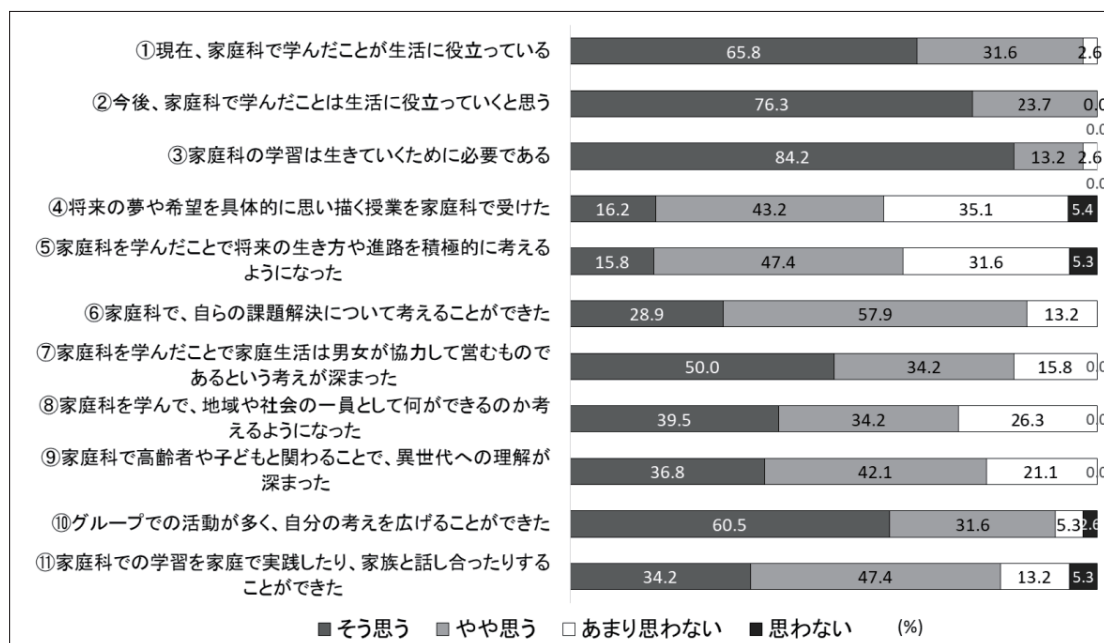


図2 小・中・高等学校の家庭科に関する認識

IV まとめ

小学校の教科に関する科目「家庭科内容論」の授業を受講した学生の実態等を明らかにすることにより、「家庭科内容論」の成果と課題を明らかにし、今後の授業内容への示唆を得ることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) 受講後、全ての学習内容について肯定的な認識が認められ、授業の有効性が認められた。一方で、教育方法に関する記述や教員の視点にたった記述が少ない等の課題が認められた。
- (2) 炊飯・みそ汁、手縫い・ミシン縫い等の調理・被服実習は、受講生の知識・理解と技能を高め、ものづくりの意義への考えを深めることに有効であった。また、このことは、知識や技能に裏付けされた確かな自信を得ることにつながっていた。

- (3) 授業全体が現在の受講生自身の生活や考え方の変容に影響を与えていることが推察された。
- (4) 児童に育成したい力やその指導方法の工夫として、現行及び次期学習指導要領を踏まえた内容があげられ、概ね、受講生は小学校家庭科の目標等を理解することができたと推測された。

参考・引用文献

中央教育審議会答申、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」、10、2012

矢島正・高橋望・新藤慶、小学校教員の資質能力に関する教員自身の自己評価や認識、群馬大学教育実践研究、第34号、127～140、2017

大本久美子、教員養成における教科教育の在り方に関する研究—初等家庭科教育法と教科内容論の授業内容の検討—、大阪教育大学紀要第Ⅴ部門、第60巻、45～55、2012

文部科学省、小学校学習指導要領解説家庭編、東洋館出版社、東京、2008

文部科学省、小学校学習指導要領解説家庭編、2017

参 照 URL http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/12/27/138_7017_9.pdf (2018年1月15日閲覧)

渡邊彩子他、小学校家庭教科書 新編新しい家庭5・6、東京書籍、東京、2015

